

「北海道畑作農業の持続的発展に向けて」の概要

[令和4年(2022年)3月 北海道畑作農業の持続的発展を考える懇談会]

1 北海道畑作農業を取り巻く社会経済情勢・位置づけ・現状

□ 社会経済情勢

- (世界) ○食料需要の増加と不安定な農産物生産 ○グローバル化の一層の進展 ○SDGsの取組の広がり
- (国内・道内) ○人口減少や高齢化・過疎化の進行 ○カーボンニュートラルの推進 ○新型コロナウイルス感染症の拡大

□ 位置づけ ○高い食料自給率 ○地域を支える基幹産業 ○多面的機能の発揮

- ### □ 現状
- 主要畑作4品目の作付面積は約30万haとほぼ増減なし
 - 経営体数はR2で8,065経営体とこの15年間で35%減少、1戸当たり経営面積は34.4haと1.4倍に増加
 - 農業粗収益はR2で10百万円程度、労働時間はてん菜、馬鈴しょで長い



2 将来方向（基本的考え方）

1 需要に応じた食料の安定供給

- ・需要動向を踏まえた安定的な生産の推進
- ・スマート農業を取り入れた生産性向上
- ・一層の省力化、品質向上を図る新品種の開発・普及、新規作物や新たな生産技術の導入
- ・生産と実需の連携強化 など

「DX」の視点
(工学的アプローチ)

【モノ】 高い生産性と持続的生産体系への
転換により、需給に柔軟に対応

2 環境に配慮した持続的生産の推進

- ・地力維持等を考慮した輪作体系の構築
- ・たい肥、緑肥等の有機物の施用による土づくり推進
- ・動力燃料の使用量削減
- ・気候変動にも対応可能な作物体が持つポテンシャルを最大限発揮 など

「グリーン化」の視点
(生態学的アプローチ)

【人】 個別経営体とサポート体制の強化による人材づくり

【地域】 地域の条件や特色を活かした「多様な輪作体系」を確立

広大な土地資源を活かし、農業者が夢と希望を持って取り組める
北海道畑作農業を推進

3 展開方向

(1) 需要に応じた食料の安定供給

<麦類>

- ・基本技術の励行、新品種の普及推進
- ・ドローンやA I等を活用した精緻で省力的な生産
- ・秋小麦の前作確保

<豆類>

- ・基本技術の励行、新品種の普及推進
- ・ドローンやA I等を活用した精緻で省力的な生産
- ・省力機械等の導入促進
- ・複数年契約栽培の推進（小豆、いんげん）

<てん菜>

- ・省力化、低コスト化、直播の推進
- ・病害抵抗性品種の導入
- ・今後のてん菜生産、流通のあり方検討

(2) 環境に配慮した持続的生産の推進

- 経済活動と環境配慮の両立
- 地域の条件や特色を活かした「多様な輪作」の確立

※下線部は重点的に取り組む事項

<馬鈴しょ>

- 生食・加工・でん粉原料用
- ・省力機械等の導入、貯蔵施設整備による生産拡大
- ・抵抗性品種への転換強化、まん延防止対策の徹底
- ・良食味、高収量な品種開発、栽培技術の確立

○種馬鈴しょ

- ・省力生産強化、高品質生産技術による面積確保
- ・I C T等を用いた病害虫管理技術の開発
- ・安定生産に係る仕組みの構築

<その他（野菜、新たな省力作物など）>

- ・需要動向の的確な把握と安定的な生産
- ・新たな輪作作物(さつまいも等)へのチャレンジ
- ・労働生産性の高い作物、緑肥の導入



4 主な地域における振興方向

【オホーツク地域】 豆類を加えた4品による輪作の確立、ジャガイモシストセンチュウ対策の推進

【十勝地域】 新規作物導入を含めた輪作体系の維持、I C Tの総合活用や最新技術の導入などによる生産力向上

【道央・道南地域】 生食用馬鈴しょの地域ブランド化など馬鈴しょの安定生産の確保、野菜や労働生産性の高い作物導入など、気候や都市近郊などの土地条件を活かした生産

5 持続的発展に向けて

- **変化への対応** ～ 内外の様々な要因が変化中、畑作農業も変化に対応しつつ、持続性を確立していく必要。
- **経営資源を最大限活用** ～ 「DX」と「グリーン化」の視点による取組を推進することで、「モノ」「人」「地域」の強化と多様な輪作の確立を図り、農業者が夢と希望を持って取り組める北海道畑作農業の実現を目指していく必要。
- **次の世代への継承** ～ 多様なステークホルダーとの対話を通じてニーズに応えていくことで、新たな需要の開拓、北海道ブランドの付加価値向上等につなげ、こうした取組を通じて、北海道畑作農業の未来を次の世代に受け継いでいく必要。